

JAUW 茨城支部だより 2017年度-4号

URL <http://jauw-ibaraki.net/> 2018年3月18日 一般社団法人 大学女性協会(JAUW)茨城支部 発行

70周年を寿ぐような春の日差しに包まれた3月4日、梅まつりで賑わう水戸市芸術館の会議場で記念式典・記念事業を開催いたしました。小野寺茨城県副知事、高橋水戸市長、鷲見本部長を来賓としてお迎えし、式典・記念講話と対談、終了後のハロー・ワールド鑑賞と盛り沢山の一連の行事を滞りなく終えることができました。県内各地から集われた友人や会員は目標の70名を超え、充実した有意義な時間を内外の参加者と共有できました。

来賓として駆けつけられた鷲見本部長からは、出版した本の中身に踏み込んで、ポエムも紹介しながら大きな励ましを頂きました。また、講師の森花子アナウンサーは、本を読み感想も交えて「YOROIを脱いで～わがままに、自分らしく生きる～」との演題で講話をされました。その後の対談では船木成記氏からの、若い世代は本気で生きる真剣な大人と向き会える機会をもつべきだとの言葉が印象に残りました。多様性社会実現するためには、従来の発想や固定観念をいかに変えていくべきか、正に本で求めたテーマに呼応したトークショーであったと感銘いたしました。

本の発行と70周年記念事業を執り行うことが、私に課せられた大きな目標でした。発行間もない10月26日に全国セミナーで発表、11月26日に出版記念シンポジウムの開催、1月20日に新年会、そして今回の70周年記念事業と半年の間に大きな行事が続きました。特に、今回の70周年事業では、今高実行委員長を中心に実行委員会を何度も開催し、役員の総合力でDVDの作成・講師依頼と調整・チラシの作製と広報・会場予約・来賓招聘等と万全の準備態勢で当日を迎えることができました。また、開催に当たり文真堂前野社長とプレス廻りをさせて頂き、読売新聞には開催前の3月2日に記念事業開催の案内と本の紹介記事が掲載されました。記事を見て参加された方が支部に入会することとなり新聞掲載の力を感じた次第です。終了後の3月9日には、茨城新聞に記念事業を掲載していただきましたことも報告いたします。このように事業を成功裏に終えましたこと、何かとご尽力いただきました関係各位並びに実行委員・役員の皆様に心より感謝申し上げます。



支部長：M・K



★ 70周年記念事業

のどかな春日和の3月4日、一般市民を含め約70名が集い、水戸市芸術館会議場で70周年記念式行事を催すことができました。準備を通して出会ったすべての人に感謝の気持ちでいっぱいです。また、加藤支部長・横須賀副実行委員長はじめ、この行事にコツコツと積極的に関わっていただいた実行委員とご家族の協力で心から感謝申し上げます。

記念事業の基本理念を「未来に向かって力強く発展してゆく」支部の思いと一般参加者を中心に置いて当会活動を「いかに分かりやすく示すか」の2点に決め、1月から約5回の短期集中会議で取り組みました。記念事業のコンセプトやテーマの決定、講師・来賓選定、チラシ、ヨコ看、プログラム、賞状、席札など着々寸心と進行しました。これは当日までの間、万全の準備に力を割き、必ず成功させるという実行委員諸姉の決意と努力の結果であり、改めて茨城支部の底力と支部を取り巻く関係機関の力強い支援に感動しました。

行事を終えて、講師の森さんからは「私自身もとても勉強になるイベントでした」船木さんからは「本を拝見し、これだけのスケールの大きな活動をされていたのだということに改めて認識するとともに、皆さんの活動の一助に、なれていたとしたら、こんなに嬉しいことはないなあと、感じた1日でした。」というコメントをいただきました。一般参加者からも「素晴らしい会だった」という手ごたえある言葉をいただきました。

実行委員会としては、次の作業として「70周年記念誌」の手作り発行計画があり、会員の皆様に原稿をお願いする予定です。敗戦から70年、戦争への後悔と反省から、茨城支部の先輩諸姉が掲げた平和と男女平等のトーチをつなぐよう、自分たちの思いを書き込んでいただければ幸いです。

70周年記念事業実行委員長：H・I

家庭と仕事、在り方探る

男女共同参画や多様な社会について考
える講演会(大学女性協会茨城支部主催)
が4日、水戸市五軒町の水戸芸術館で開
かれた。参加した市民ら約70人が「ワ
クライアパラス」を中心に、家庭と仕
事との多様な在り方などについて活発に
理解を深めた。

講演会は、女性の地位向上を自覚し1
948年に発足した同支部の70周年記念
事業として開催。NHK水戸放送局アナ
ウンサーの森花子さんと、博覧会や内閣
府男女共同参画局を経て、兵庫県尼崎市
顧問を務める船木成記さんが、家庭と仕
事との在り方や、あるべき姿などにつ
いて対談した。

子育てしながらランナーとして
働く森さんは「出産後、どんな働き方
が選択できるのか、もっと助言をもらえ
る場があれば、さまざまな生き方が可能に
なる」と強調。船木さんも「生活の中に
仕事が含まれるべき生き方について、
自分の物差しをしっかりとつなぐことが大
切」と指摘した。(前掲欄)

大学女性協会茨城支部

水戸で講演会 識者「自分の物差しを」

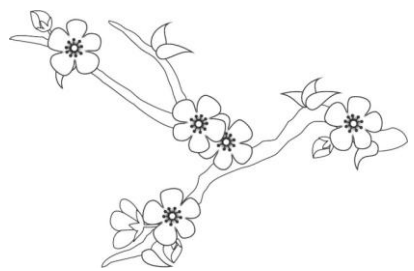


家庭と仕事との在り方について対談する船木成記
さん(右)と森花子さん(中央)＝水戸市五軒町

茨城新聞に掲載されました



記念式典での感謝状贈呈



★ 講話「YOROI を脱いで～わがままに、自分らしく生きる～」と対談を聞いて

森花子氏は、NHK 水戸放送局のアナウンサー。わがままに自分らしくをモットーに、仕事に育児に奮闘してきたが、人生の選択が正しいのかどうか分からないままにいと、女性が働くということについてご自分の経験をもとに話をされました。

「11 年前（2007 年）に入局し、すぐに結婚。2 年目に産休・育休を取得。前例がない、女子アナなのに産んじゃうの？などの拒否反応の中で迷う自分を、当時副部長だった先輩女性が後押ししてくれた。あなたが前例になるのよ、これからの若いアナウンサーのために精一杯輝きなさいねと。先輩は仕事以外のすべてを捨て、仕事に邁進されていた。そのような中、森アナをひとつの戦略として使うことができるのではないかと戦略のもと、水戸放送局に配属される。そして 2011 年 3 月の震災に。義母が、1 歳児だった孫を責任をもって看ると言ってくれ、一週間、放送局に泊まり込むことができた。自分の経験から粉ミルクの呼びかけをし、地域の人々とマイクをとおして繋がったとの実感を得ることができた。その後、仕事と生活を繋げることができないかと考え、「エンジョイコーナー」を設置、子どもを連れて取材に行ける環境を創った。母親目線での取り組みもできやりのが増え、森ママアナウンサーとしての価値が付き、立ち位置が変わって行った。そして逆単身赴任で東京へ。このような選択は良かったのかと常に迷う自分に、「お母さん、僕も頑張るから、頑張っ」と子が言ってくれた。あなたがいてくれたから、私の人生を歩んで行くことができると息子に言いたい。仕事でも母親としても輝いていたい。生き方の選択肢が多様になってきた。女性の活躍の場がさらに増える取り組みを望みたい。」

森氏の話を受けて、船木成記氏との対談に。船木氏は、博報堂のディレクターとして内閣府との協働など豊富なご経験を持つ立場から、導入では内閣府の女性活躍政策や働き方改革に疑問を投げかけながらも、「人は物語を生きる動物だ」との表現で森氏の話を受け、「社会が作ってきた鎧」をいかに壊していくかを軸に持論を展開されました。「我がままは、我、あるがまま」ということ、ワークライフバランスではバランスや両立の問題ではなくライフの中にワークがあるとのとらえ方に、物差しを外にはではなく自分の中に持つ、働き方改革ではなく大人の生き方改革だ、これからは人生をどう生きたいかを外に発信できる人材の育成が大切、と対談が展開しました。人生 100 年時代、社会の行方が分からないという岐路に立っている。子どもたちには、本気な大人に出会うように、そして大人は本気で人生に向き合っているかを自問自答してほしいとのまとめが胸に迫りました。

大学女性協会茨城支部 70 周年に相應しい哲学的でもあるセッションが展開されたことを感謝しました。

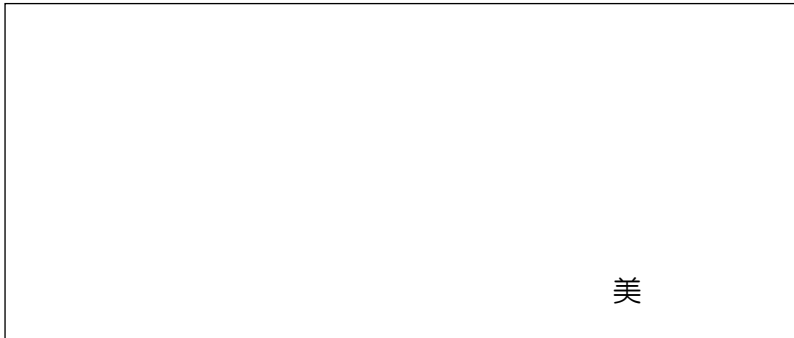
J・J



★ 出版記念シンポジウム報告

本を手渡し、思いを届け、支部活動の広がり！

2年余りにわたり紡ぎ続けた支部の本「YOROI を脱いで・・・」の発刊にあたって、昨年 11 月 26 日に出版記念シンポジウムが茨城県総合福祉会館で開催されました。茨城県医師会の共催を受け、来賓として茨城県女性青少年課統括監の鈴木圭子氏から祝辞を頂戴しました。



内容は3部構成で進行されました。出版の軌跡についてパワーポイントによる概要説明の後、本作成にご尽力下さった長谷川幸介先生の基調講演がありました。まず静間さんの回想から始まり、多くの女性たちが自分たちの暮らしや生き方を問いながら、社会を変えていく活動に取り組

んできたと話されました。そして、これからの私たちの活動について、次のようなご助言やご提案を頂きました。

- ◇人工知能によって仕事が大きく変わる中、21 世紀型学力として子どもたちに必要とされる「自立」「交流」「情報」のような能力について、男女相互に発揮できる方策を合わせて考えて欲しい。
 - ◇少子高齢社会で課題が山積する中、子どもの学力やお年寄りの問題などについて調査しては？
 - ◇これから茨城でも、女性たちが今までやってきた幸せになるためと思う感覚が最も必要になる。この重要な感覚を、今までと違う使い方社会を変え、県民に伝えていって欲しい。
- これらは、私たちのこれからの考えるヒントとなるお話しでした。

講演に引き続き円卓シンポジウムでは、一般参加者を含め 39 人の様々な発言で盛り上がりました。

編集に関わった会員からは、「大学の出前講座が本作成へのエネルギー」「活動の軌跡を本にまとめて手渡したい思いから始まった」「多くの方々の協力のお陰」「それぞれの意見を集約する大変さ…やけどするほど？」「50 回を超える編集プロセス自体がワークショップ、それが支部の財産」「本のタイトル選定に紛糾するも、いい結果となった」「調査研究の報告を広く伝えたかった」などです。

また、先輩方からは、「不安もあったが感謝の一言」「ポエムでの表現が素晴らしい」「表などが読みやすい」「本屋さんに並ぶものを望んでいた、さらに国会図書館にも」「支部が声を出せたことが嬉しい」「大学で受け入れて頂けたこと有難い」「結婚観に納得」などのご感想を頂きました。

さらに、「今後この本を地域に伝えるツールとしたいが、その活用や連携については？」のコーディネーターの問いかけに参加者から、「自分が所属する他の団体に紹介、連携も」「行政や学校などで活用できれば」「行政相談センターの総会で皆さんに紹介したい（支部とコラボの方法も）」「いばらき教育プランの男女共同参画の中で理解を得たい」「市の女性議員に配りたい」「市の生涯学習で参考になる資料」などのご意見が出されました。参加者からの発言を受けて、「よりよい地域づくりのために、本を手渡すことで開いたトビラから支部活動が広がっていく契機としたい」と結びました。





最後に、出版にあたって私たちの無理な要望にも応えて下さった文眞堂の前野社長さんへ感謝を込めて花束を贈呈し、閉会となりました。

E・M



★ 本部新年会に出席して

1月13日、新宿の京王プラザホテルで開催された新春のつどいで、2017年度国内奨学金贈呈式が行われた。会場と南極で越冬中の元奨学生の鈴木さんとの交信は時間差はまったく感じられず、すぐそこにいるようなリアルタイム感が驚きでした。また、贈呈式後の会食・懇談で私たちのテーブルで一緒した方は埼玉大学大学院理工学研究科博士前期課程2年生で環境システムを研究している大塚美緒子さん。今回奨学金贈呈の対象となった研究は、一次元量Bi ナノワイヤー熱電変換素子の巨大ゼーベック効果実現とその機構解明。ナノワイヤーという材料で発電をさせる研究とのこと。これが実用化すれば未来のエネルギーとして大いに期待できる。彼女は昨年のノーベル賞授賞式に、日本から若手研究者として選ばれて出席している。奨学生からノーベル賞受賞者が輩出されるのも夢ではないと感じた、素晴らしいひと時であった。

Y・M



南極との交信の様子

★ 支部新年会



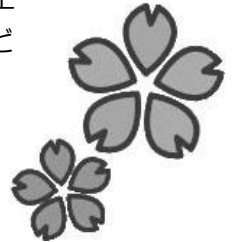
1月20日(土)11時30分～水戸京成ホテルで開かれました。出席した会員全員から近況報告を伺い、和やかに歓談を楽しみました。



新入会員紹介

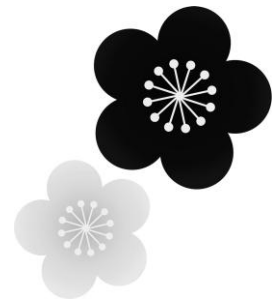
今年度から入会致しました水戸市のH・Aです。入会と同時に 70 周年記念式典に参加させて頂きました。70 年の伝統の重み、そして諸先輩が築いてこられた歴史を感じました。その中で、森花子さんと対談された船木氏の明快なお話に啓発を受けました。

私は、国連の目標SDGs のキーワード“誰も置き去りにしない”を自分の目標にしています。常日頃、「目の前の一人を大切にする生き方ができる人間に成長し続けたい」と思っております。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。



2018年度 総会のご案内

- ◆日時 4月28日(土) 13時～
- ◆会場 みと文化交流プラザ(びよんど) 501
- ◆内容 事業報告、会計報告と監査、事業計画・予算案他
- ◆シリーズ [MY・WAY]
講師 吉田紘子会員



編集後記

外山滋比古さんが「本の知識が役立つのは 30 歳まで。40 歳を過ぎたら本に頼らず自分で考えることが必要です。」と言っています。40 過ぎたら知識を得るのではダメ知性を働かせなさい…ということのようです。3 月 9 日現在、吉野源三郎の「君たちはどう生きるか」の累計発行部数が 250 万部(漫画 200 万部、新装版小説単行本 50 万部)を突破したそうです。若い人達が読んでくれること、日本中にコペル君がいてくれることを期待してしまいます。
(夢見る昔少女)

